

スポーツ実況における I モード表現としての＜ça + 動作動詞＞

栗原 唯（大阪大学）

スポーツ実況とは、眼前で生起するスポーツ選手（や監督）による動作を記述していくものである。このことから、以下(1)(2)のような、動作を表す動詞が選手をさす名詞や代名詞を主語にとった発話の多用が予想できる。

(1) *Ayuso va aller faire le sprint pour la deuxième place* (2024 年ツール・ド・フランス第 4 ステージ)

(2) *il revient sur la box* (2024 年パリオリンピック BMX パーク男子決勝)

しかし、パリオリンピックを含む 2024 年度開催の世界規模のスポーツイベントから、競技形態・実況中継の異なる 8 タイプの競技をくまなく調査を行なったところ、名詞や前置詞を核とした非動詞発話文が実況部分の発話の半数近くを占め、残り半数弱の動詞発話文の中には、その主語に中性代名詞 *on* (3)や指示代名詞 *ça* (4)をとるものが散見された。

(3) *et cette fois on vient chercher le block out* (2024 年バレーボールネーションズリーグ男子第 3 週フランス対日本)

(4) *et là ça accélère* (2024 年パリオリンピック 100m 男子平泳準決勝第 1 ヒート)

(3)はフランスチームがブロックアウトを決めた時の発話、(4)は先頭を泳いでいた選手が加速した場面での発話であり、どちらも＜チーム・選手名 + 動詞＞でも言い表せそうなイベントの描写である。なぜここで中性代名詞 *on* や指示代名詞 *ça* が現れるのだろうか。本発表では、特に後者の＜ça + 動作動詞＞型の発話を取り上げ、こうした発話の特性と実況というディスコースにおけるその機能を記述する。

＜ça + 動詞＞型の構文については、春木 (1983 ; 1991 ; 2014a ; 2014b ; 2016) による一連の研究が、*pleuvoir*、*mouiller* などの気象動詞、*tonner* など周辺の音響環境を描写する動詞、*glisser* などの身体的な動きや *sentir*、*gratter* など感覚を表す動詞、さらには移動動詞など、広範な動詞を取り上げ分析しており、その I モード (中村 2019) 的な特徴を指摘している。

「Ça mouille (ça + 動詞) 構文」(春木 2014b ; 2016) と名付けられたこの構文において、*ça* は「具体的な何かを指示しているのではなく、発話が述べている事態と認知主体を包み込む形で認知の場を指して認知の場に発話を結びつける働き」をしており、発話は全体で「事態

を引き起こすものと事態の影響を受けるもののいずれをも包み込む形で、認知主体がインタラクションを通して認知した事態を全体的に表している」という (春木 2014b, 41)。ここで取り上げられている表現はどれも、認知主体を取り巻く環境や認知主体の動作、感覚に結びつくもので、認知主体はいわば経験主体である。他方、(4)において認知主体は眼前の選手の動きを捉えるわけだが、ここでは現象と認知主体の間に物理的インタラクションはなく、現象に対して *ça mouille* や *ça me gratte* と同レベルで経験主体であるとは言い難い。本発表では、しかしながら、スポーツ実況における(4)のようなく *ça* + 動作動詞 > も、*Ça mouille* (*ça* + 動詞) 構文の一端を担うものであると考え、それを示していく。

まず主語位置を占める *ça* が人を指す用法ではなく *référence nulle* (Maillard 1994) であり、認知像形成のための「参照点」(中村 *ibid.*) として認知の場を導入していること、発話全体がこうして I モード型認知をベースに事態を描写していることを示す。次に、認知主体が認知事態との間に物理的インタラクションを持たないケースである *ça* + 動作動詞 > が、認知主体と事態のインタラクションが認められる *Ça mouille* (*ça* + 動詞) 構文のネットワークに位置付けられることを、中村 (*ibid.*, §9) による外置 (D モード化) の程度と主体化の過程をベースにした与格の意味地図の分析アプローチを援用して示す。最後に *ça* を参照点マーカーとして I モード的に認知像を形成する *ça* + 動作動詞 > の実際のスポーツ実況での使用を観察し、実況においてその I モード的性質がどのように機能しているのかをみる。

<上記引用参考文献>

- 春木仁孝 (1983)「フランス語の非人称構文：副詞的要素の機能と *énonciation*」『フランス語学研究』17(1), 18-35.
- 春木仁孝 (1991)「*ça pleut / il pleut* —現代フランス語の“非人称主語”の *ça* をめぐって—」『ロマンス語研究』24, 27-34.
- 春木仁孝 (2014a)「*ÇA* を主語とする発話と認知モード」『フランス語学研究』48(1), 57-76.
- 春木仁孝 (2014b)「*ça mouille* (*ça* + 動詞) 構文のネットワーク」『時空と認知の言語学』3 (大阪大学大学院言語文化研究科), 41-50.
- 春木仁孝 (2016)「再び *ça mouille* (*ça* + 動詞) 構文の特性について」『言語文化共同研究プロジェクト』2015, 31-40.
- Maillard, M.(1994) “Concurrence et complémentarité de *il* et *ça* devant les prédicats impersonnels en français contemporain ou comment distinguer une phrase asubjectale d'une phrase à sujet indistinct ?”, *L'Information Grammaticale* 62, 48-52. https://www.persee.fr/doc/igram_0222-9838_1994_num_62_1_3101 (2025 年 3 月 30 日アクセス)
- 中村芳久 (2019)『認知文法研究：主観性の言語学』くろしお出版.